

校長室だより

令和6年11月29日(金)
第30号
十日町市立中条中学校校長室

「叱る」と「怒る」



学校に定期的に届く「ニューモラル」(モラロジー道德教育財団発行)という冊子があります。その11月号に『叱る』と『怒る』はどう違う』という特集がありました。その一部を引用し、考えてみたいと思います。教職員も保護者も結構参考になる内容であると思います。ご一読ください。

どちらも相手の非をとがめ、注意を与えるときに用いる言葉です。叱られたり怒られたりした人は、きっと苦い思いを味わうでしょうが、おそらく叱ったり怒ったりする人も決してうれしく楽しい気持ちでそうしているわけでは必ずずです。どちらの側もいやな気分になるのであれば、そんなことはしなければいいような気もしますが、人がよりよく育っていく中では、時として「厳しい注意」というものが必要になるのでしょう。

ここで「叱る」と「怒る」の意味についてももう少し考えてみると、「怒る」といった場合、その根底には「腹を立てている」という心の状態があるようです。一方の「叱る」は、腹を立てているわけではないため、例えば「優しく叱る」という表現も可能になります。

腹を立てているのではなく、教育的な配慮をもって冷静に「叱る」のか、それともただカッとなって感情的に「怒る」のか。その差は、相手の受け止め方にも違いを生むことになるかもしれません。

相手が小さな子どもだったとしても、自分や他人を傷つける行為については、子ども本人を守るためにしっかりと叱る必要があるはずずです。また、公共の場で騒いだり、うそをついたりというように、社会のルールや道徳に反する行為についても同様ではないでしょうか。難しいのはその際の叱り方です。感情的に怒ってしまえば、子どもの心を傷つけ、かえって反発を生む結果になりかねません。子どもにも親にも納得がいて、よい結果がもたらさせる「プラスになる叱り方」はないものでしょうか。

文筆家の有吉忠行さんは、都心の混雑する駅で整列乗車を乱して車内に駆け込んだ小学校2、3年生ほどの男の子と、その子を叱った母親の様子を著書の中で次のように描いています。(有吉忠行著『すばらしき母親の物語—母と子の感動42編』(モラロジー道德教育財団発行))

「お母さん、ここ、ここ、お母さん」

男の子は母親のために席をとっていたのです。母親がそばに来るのを待って、自分は席を立ちました。ところがまったく思いがけない母親の姿を見ることになりました。母親は男の子の声に応じないまま、すぐ横に立っておられた初老の女性へ、静かに……。 「どうぞお掛けくださいませ、どうぞ」男の子は、ふに落ちない。げげんな顔です。



やがて母親は、男の子へ声を抑えて、それでもはっきり言いました。「あなたは、皆さんが並んで電車を待っておられたのに。順番を乱して乗り込んで、この席をとったでしょ。私のためという気持ちはよく分かるわ。でも、ね。順番を乱して乗ったのは、してはいけないことをしたの。してはいけないことをして、この席をとったの。だから私は、その席に座ってはいけないの。もちろんあなただって、座る権利はないの。私の言うこと、あなたなら分かるでしょ」それは、厳しくとがめるような重いものではなく、ごく普通の心優しい語りかけでした。

「はい、分かった。もうしない」男の子は、二度小さくうなずきました。

初老の女性が母親に言いました。「お母さん、よくお分かりになったのですから、今日は掛けてあげてください」しかし、母親は丁寧に言葉を返しました。「ありがとうございます。でも、私が掛けますと、結果的には、この子のしたことを認めてしまうことになってしまいます。この子のためにも、お掛けくださいませんか」初老の女性は男の子に「ごめんなさいね」と声を掛けて席に腰を下ろしました。

やがて発車。母親の右手は電車の揺れから守ってやるように男の子の肩にかけられ、母親に耳元で何か面白いことでもささやかれたのか、男の子は笑顔になって母親を見上げていました。

その光景を見ていた有吉さんは「愛情を秘めた理路整然とした優しい言葉で語りかけ、最後を『あなたなら分かるでしょ』の一言で結ばれたものの中には、まぎれもなく、子への深い信頼があった。そして男の子は、その母親の信頼を受け止めたことで『はい、分かった。もうしない』という言葉に母に返したのではなかろうか」と述べています。

好ましい叱り方とは、叱られた本人が過ちを認めて「よし、これからは改めよう」と思うものでなければならないでしょう。叱られることを快く思う子どもはいないでしょうが、たとえ一時は反発心が湧き起こったとしても、その激情が過ぎ去った後に「自分は確かに愛され、信頼されている」と実感できたなら、その叱責は子どもの心に届き、成長の糧になっていくのかもしれない。

親心をもって叱るということが大切なのは、親がわが子に対する場合だけでないでしょう。例えば上司が部下に、先輩が後輩に、あるいは同輩以上の人に対して助言や忠告をする場合にも、大切な心掛けと言えます。いかに正論でも、それを押し付ければ角が立ちます。また、誰しも他人から間違いを指摘されるのは快いことではないでしょう。他人の落ち度を指摘する際は、時機や場所、場合などに十分配慮した上で、相手の立場を思いやった言葉がけを考える必要があるのです。その「思いやり」の極致こそ、相手の成長を願う親心です。そして、「自分は正しいことを言っている」という思いは、相手の気持ちや状況を見えにくくする点にも注意が必要でしょう。

私たちは正しくあろうとしながらも、必ずしも理想通りには生きられない面をもってします。しかし、そうした不完全な面を持ち合わせた人間だからこそ、事あるごとに自分の心を省みて、広く温かい「親心」というものを思い起こす必要があるのではないのでしょうか。お互いが不完全な面を自覚して、共によりよい方向へ進んでいく姿を目指していきたいものです。

この文章を読みながら、これまで怒ることばかりが多かったような自分を省みています。よく先輩から「上手に叱りなさい」と言われたものです。

大切なことは、叱られた側が納得して受け入れられる内容であるかどうかではないかと思えます。叱る内容について、子どもや生徒が納得できるように教えたり、諭したり、説明したりする過程が必要なのではないかと感じます。子どもの中で「ふに落ちれば」必ず子どもは受け入れてくれるはずですが、これからも決して感情のままに生徒や職員に接することのないようにと考えています。

これは、いじめの対応でも同様です。相手に心身の苦痛を与えればいじめです。相手に対しての行為が、どうして心身の苦痛を与えたのかをじっくり考えさせ、教え諭す必要があるのです。その先の対応としての一つの方法が謝罪です。最近、ある行為に対して行為の対象者が心身の苦痛を訴えたため、すぐに謝罪を求める傾向があるように思います。行為に対して目を向けさせ、省みることをさせ、納得した上で対応していきたいと考えます。そうでないと謝罪の場は形式的になり、電車の中の男の子のように納得はしないのではないかと思うのです。

